

小事と大事

仕事の中には小事と大事がある。ともすれば小事を軽んじる傾向があるが、渋沢栄一は「水戸光圀公が壁書の中に「小なることは分別せよ、大なることは驚くべからず」と認めて置かれたが、ひとり商家といわず、何事にもこの考えでなくてはならぬ。大きなことは片々たる小さなことの集積したものであるから、どんな場合をも軽蔑することなく、勤勉に忠実に誠意を籠めてその一事を完全に仕遂げようとしなければならぬ」（『自ら箸を取れ』『論語と算盤』）と語っている。

小さな失敗や誤りは誰にでも、また頻繁に起こるものである。したがって、これらが放置され、見過ごされることはよくある。しかし、小さな失敗を見過ごしていると、すぐに正さなくても構わないという雰囲気職場に生じる。また、小さな失敗の累積が化石化されると、放置を正当化する論理となり、職場の自浄作用がなくなる。その結果、小さな失敗が複数連動して大きなマイナスを引き起こすようになってしまう。

大事と小事の区別なく、小事も積んでは大事となることを忘れずに、同一の態度、同一の思慮をもってこれを処理することに心掛けておこう。小さな失敗や過ちは、本人の不注意なり気の弛みから起こることがほとんどなのだが、本人はそれに気づかない場合が多い。小さな失敗や過ちの中に、将来に大きな禍根が潜んでいることを心しておいてほしい。

大事に至った場合は、どのようにすれば道理にかなうかをまず考えること。道理とは物事のあるべき筋道、人として行うべき正しい道のことであって、熟慮と経験から導かれるものである。次に、その道理に適ったやり方をすれば国家社会の利益になるかを考え、さらに、そのやり方が自己のためにもなるかと考えればよい。

保身を図ってその場凌ぎの対応をしたり、自分の利益を第一に考えてしまうと取り返しのつかない事態に発展する。近江商人の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」という言葉を服膺しておくのも一策である。

一方、自分の手に余るような仕事を放り投げるようでも駄目。「人事をつくして天命を待つ」姿勢が求められるが、松下幸之助は「天地自然の理に従い、志をもって為すべき事を為している限り、人間には不可能はない」と断言している。人生に超えられないハードルはなく、使命感に燃えて仲間と共に行っている仕事に対しては命を懸けて当たるという覚悟が必要である。

目前のハードルを避ければ避けるほど次のハードルが高くなる、という人生の摂理があることも頭に入れておきたいものである。